

平成30年度前期
学生による授業評価アンケート
調査の結果

平成30年9月

志學館大学事務局学務課
志學館大学 I R 室

学生による授業評価アンケート調査の結果

この報告は、学生授業アンケートの結果の概要を示し、個々の教員が、自己の担当科目のアンケート集計結果（PDF版）を基に自己点検・評価をするために必要な統計的情報と、それらの利用法について示すことで、授業改善計画を考える上での参考にして貰うことを目的とする。

1. 調査の概要と資料

29年度に比べて、学生への質問項目の一部が改善・改訂された。授業の内容・方法に関する質問項目は、以下の10項目と自由記述で、若干の修正が加えられ質問意図をより明確にしたものが4項目（Q1、Q2、Q3及びQ7）、新たに設けられた質問が2項目（Q9、Q10）であった。

- Q1. 授業の分量は適切であった（5.強く思う～1.まったく思わない）
- Q2. 授業の進み具合は適切であった（同上）
- Q3. 教員の教え方は分かりやすかった（同上）
- Q4. テキスト、プリント、板書、提示資料等は理解の助けになった（同上）
- Q5. 毎回の授業のねらいははっきりしていた（同上）
- Q6. 授業は講義要項に沿った内容であった（同上）
- Q7. 授業の内容を通じて新しい知識を得たり、新しい発見があったりした（同上）
- Q8. 質問や意見に適切に対応してもらえた（同上）
- Q9. 予習、復習の課題やアドバイスは適切に与えられた（同上）
- Q10. 積極的な参加（自ら考えながらの受講）が求められる授業だった（同上）
- Q11. 自由記述による意見

その他、授業ごとの学生の学修行動に関する質問が5項目あった。

- Q12. この科目の予習に毎週当たった平均時間（1.していない、2.30分程度、3.60分程度、4.90分程度、5.それ以上）
- Q13. この科目の復習に毎週当たった平均時間（同上）
- Q14. 授業時間内に、この科目を熱心に学習した（5.強く思う～1.まったく思わない）
- Q15. 授業時間外にこの科目を熱心に学習した（同上）
- Q16. あなた自身の受講態度の総合評価（10.高⇔1.低）

Q1～Q3で回答選択肢が変更されたため、Q13とQ14以外のすべての設問で、中央値3（Q16の場合は5.5）は「普通」であったことを意味し、これより大きい場合は「よかった」、小さい場合は「よくなかった」と学生から受けとられたことを意味する。Q13とQ14の学修時間の「5.それ以上」は簡易的に120分として分析した。ほかに、演習科目と共通教育科目のみに係る質問があったが、無回答のものが多く分析対象としなかった。

2. 調査結果

学士課程の今期の開講授業数は461（受講者がなく授業が行われなかったものを含む）であったが、実技を中心とした科目等でアンケート調査の対象となっていない授業や回答なしの授業があった結果、250授業で回答が得られた。このうち回答数が5以上の210授業を分析対象とし、授業ごとの回答の各質問内の平均値の平均値と標準偏差及び標準偏差の平均値を求めた。回答数が5未満で分析対象としなかった授業は40授業であった。回答数5以上を分析対象とした理由と、分析結果の解釈に統計学的には一定の留保が必要である点は昨年度と同じである。

大学院課程では、18授業が開講され、延べ143名が受講し110名の回答があった。

2.1 学士課程の授業の内容及び方法

(1) 回答率

204授業の平均回答率は、0.47で（全受講者数で全回答数を除いたもの）、昨年度前期の0.41を上回った。教員から学生へよく周知されたためと考える。

(2) 個票の設問別平均値

授業ごとのQ1～Q10までの設問への回答の平均値の、全授業の平均値と標準偏差を、表1に示す。

Q1～Q8では平均値は4を超え、Q9とQ10も含めすべて3より有意に大きかった。これらは、内容、授業方法、対応等の面で適切に実施されたと受け止められている授業が多いことを示している。この傾向は、昨年度とほぼ同じである（昨年度はQ4が4以下であった）。

個々の授業で、上記の評価からの「外れ」が小さい（平均的である）と判断する目安として、平均値 $\pm 0.5 \times$ 標準偏差の値を、表1の下2段（表の上・下限値）に示す。個票の平均値がその範囲に入っていれば「ほぼ平均的である（平均値と同じレベルにある）」と評価できる（統計学的には厳密なものではない）。

表1 授業の質問ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
平均値	4.13	4.11	4.06	4.21	4.16	4.13	4.26	4.08	3.96	3.95
標準偏差	0.32	0.33	0.42	0.32	0.33	0.29	0.32	0.37	0.34	0.42
上限値	4.29	4.27	4.27	4.37	4.32	4.27	4.42	4.27	4.13	4.16
下限値	3.97	3.94	3.85	4.05	3.99	3.98	4.10	3.90	3.79	3.74

明らかに優れている又は改善が必要と判断する目安として、平均値 $\pm 1.96 \times$ 標準偏差の値を表2示す（表の上・下限値）。また、この上・下限値の範囲を外れ、「優れている」と「改善が必要である」と評価できる授業数を下2段に示す。Q6の結果から、講義要綱に則った授業が多いことが看取される。一方、すべての設問で、改善が必要とされた授業が、それぞれ3～10授業あった。特に「Q5. テキスト、プリント、板書、提示資料等は理解の助けになった」と「Q7. 授業の内容を通じて新しい知識を得たり、新しい発見があったりした」で、改善を要する授業が多かった。

表2 授業の質問ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
上限値	4.76	4.75	4.88	4.84	4.80	4.69	4.89	4.81	4.62	4.77
下限値	3.50	3.47	3.24	3.58	3.51	3.56	3.63	3.36	3.30	3.13
優れている数	7	5	1	3	2	8	1	4	4	3
改善が必要な数	3	4	3	6	10	4	9	5	6	3

(3) 個票の標準偏差

授業内の各質問への回答の標準偏差の平均値を、表3に示す。設問ごとでは、「Q10. 積極的な参加（自ら考えながらの受講）が求められる授業だった」「Q3. 教員の教え方は分かりやすかった」「Q9. 予習、復習の課題やアドバイスは適切に与えられた」で、標準偏差が大きく、これらの設問では、授業内での学生の反応に比較的ばらつきがあったことを示している。

表3 授業の質問ごとのアンケート結果の標準偏差の平均値

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
平均値	0.70	0.73	0.78	0.71	0.71	0.69	0.69	0.74	0.77	0.79

2.2 学士課程の学修態度

学修行動に関する設問Q12～Q16に対する回答の平均値の、全授業の平均値と標準偏差を表4に示す（下2段の上・下限値は、平均値 $\pm 0.5 \times$ 標準偏差）。Q12とQ13の予習と復習に当てた平均時間については、ほぼすべての授業で、「1. していない」が約半数を占め、その他も「2. 30分程度」が多く、3以上の回答はごく少なく、分布は大きく偏ったものであったので、結果の統計学的解釈には注意が必要である。Q14～Q16に見られるように、学生は自ら概ね「熱心に学習し」「受講態度は良好であった」と感じているようである。

表4 授業の学修行動に関する質問ごとの結果の平均値と標準偏差等

	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16
平均値	17.5	22.0	4.05	3.52	7.70
標準偏差	13.4	10.8	0.33	0.41	0.69
上限値	24.2	27.4	4.21	3.73	8.05
下限値	10.8	16.6	3.88	3.32	7.36

2.3 授業の内容及び方法と学修態度の相関

質問項目ごとに、授業内の回答平均値を、全授業平均値と全授業標準偏差を用いて基準化し、基準化値をQ1～Q10とQ12～Q16それぞれに合計することで、授業の内容・方法の総合評価値と学生の学修態度の総合評価値を求めた。

両者の相関図を図1に示す。両者の間には、正の相関があり ($r=0.67$)、授業内容・方法に関する評価が高い授業では、高度な学修行動を引き出していると言える(例えば内容・方法の評価が全授業中1位の授業では学修行動は10位、同2位では1位、同3位では5位等)。

授業の内容・方法に係る個々の設問への回答と学修態度の総合評価値の相関をみたところ、学修態度は、「Q9. 予習、復習の課題やアドバイスは適切に与えられた」と「Q10. 積極的な参加(自ら考えながらの受講)が求められる授業だった」との相関が高く(相関係数は各0.72と0.69)、「Q4. テキスト、プリント、板書、提示資料等は理解の助けになった」と「Q6. 授業は講義要項に沿った内容であった」との相関がやや低かった(相関係数は各0.52と0.53)。これらの結果から、授業内容がよければだけでなく、予習復習事項の明示や学生のアクティブな授業参加が、学生の積極的な学修行動を引き出すことに繋がっていると推定する。

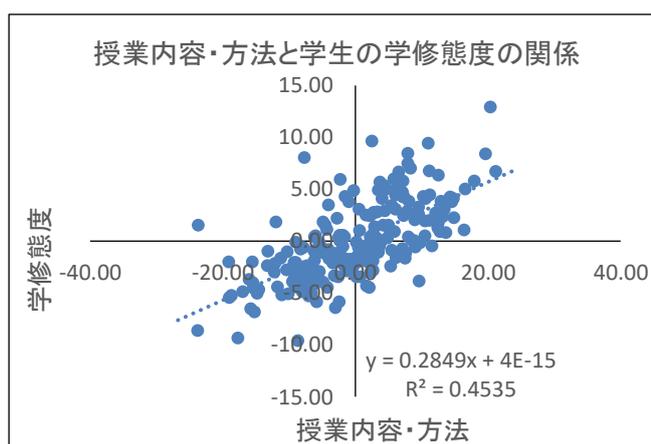


図1 授業内容・方法と学生の学修行動それぞれの総合評価値の相関関係

2.2 大学院課程の授業の内容及び方法

大学院課程では、回答率は0.77で、昨年度に比べて飛躍的に向上した。また、学士課程に比べて大幅に高かった。5名以上の回答があったのは、13授業であった。

Q1～Q10までの設問への回答の平均値の、全授業の平均値と標準偏差を、表5に示す(下2段の上・下限値は、平均値 $\pm 0.5 \times$ 標準偏差)。すべての項目で、平均値は4.5を超え、極めて高かった。多くの授業が、内容、方法、対応等の面で適切に実施されたと受けとられていることを示している。

表5 授業の質問ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
平均値	4.66	4.53	4.74	4.74	4.77	4.74	4.80	4.75	4.54	4.30
標準偏差	0.18	0.24	0.15	0.14	0.11	0.12	0.10	0.16	0.12	0.20
上限値	4.75	4.65	4.81	4.81	4.83	4.80	4.85	4.83	4.59	4.40
下限値	4.57	4.41	4.66	4.67	4.72	4.68	4.75	4.67	4.48	4.20

学修行動に関する設問 Q12～Q16 に対する回答の平均値の、全授業の平均値と標準偏差を、表6に示す(下2段の上・下限値は、平均値 $\pm 0.5 \times$ 標準偏差)。学士課程に比べて、予習・復習時間はやや長く、学生は自ら極めて「熱心に学習し」「受講態度は良好であった」と感じている

ようである。

表6 授業の学修行動に関する質問ごとの結果の平均値と標準偏差等

	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16
平均値	33.6	31.0	4.54	4.30	8.41
標準偏差	11.3	5.7	0.13	0.20	0.23
上限値	39.3	33.8	4.60	4.40	8.53
下限値	28.0	28.1	4.47	4.20	8.30

3. 調査結果の活用

平成29年度後期には、学務・学生系管理・通信システムUNIIPAへの移行期であったため、分析に十分な回答が得られなかったが、今回は29年度前期をも上回る回答率であった。

本調査は、授業の改善が目的なので、単に総合評価を見るのではなく、質問ごとに、表1、表2の上限・下限値の範囲を超えているかいないかの視点で、自己点検して貰いたい。ある授業の項目別平均値が、表1の上・下限の間に入っていれば平均値と同程度であると考えてよい。一方、表2の下限値を下回る場合には、明らかに改善が必要である。ある特定の質問項目だけの評価が下限値を下回るような授業では、評価が低かった事項のみ改善すれば、素晴らしい授業となるといった利用が可能である。

今回初めて行った、授業の内容・方法等の評価と学生の学修行動の自己評価の関係に関する分析からは、学生の学修行動を引き出すのは内容・方法等が充実した授業であると言える。特に予習・復習の課題やアドバイスを適切に与えること、自ら考えながら積極的な参加が必要な授業が、学生の授業外での学修行動の向上に繋がっていると考えられる。現在推進中のアクティブラーニングとの関連から注目したい。

回答者が少なく、今回の分析対象としなかった授業についても、Q1～Q10については、表1及び表2の値（特に表2の下限値）を基準に、個表の平均値と標準偏差を自己点検・評価に利用することを推奨したい。